笠名稱

描キ、緒ヲ施シ、又覆ヲ爲シタルアリ、德川幕府ノ時、諸侯ノ家格ニ依リテ、金紋ヲ描クヲ免シ、先箱ヲ持ツヲ許ス等ノ事アリ、先箱トハ武士往來ノ時、肩輿ヨリ前ニ挾箱ヲ擔ガシムルヲ云フ、而シテ挾箱ハ武家ノミナラズ、搢紳、婦女、平人等モ用キタリ、

〔倭名類聚抄十四行旅具〕笠　毛詩注云、笠力執反、和名加佐、所以禦雨也、

〔段注說文解字五上竹〕笠、簦無柄也、汪氏龍曰、笠本以御暑、亦可御雨、故良耜傳、笠所以御暑雨、無羊傳、蓑所以御雨、笠所以備暑、都人士傳、臺所以御雨、笠所以御暑、三傳相合、今都人士、暑雨互譌、以南山有臺疏、文選注正、从竹立聲、力入切、七部、

〔篇海二竹〕笠、力及切、音立、簦、笠、以竹爲之、集成簦笠無柄曰笠、有柄曰簦、

〔急就篇三〕簦、笠、皆所以御雨也、略中小而無把首戴以行、謂之笠、

〔類聚名義抄八竹〕笠、音立、カサ、フサク、

〔伊呂波字類抄加雜物〕笠　カサ　帽同

〔下學集下器財〕笠、カサ戴頭謂之笠也

笠初見

〔圓珠庵雜記〕笠　カサ　重なるといふ略か、擔も同じ心なるべし、俗に椀の中にかさねて、ちいさきをかさといふにて云るべし、かさにかゝる、水のみかさ、本はみなおなじ、

〔倭訓栞前編六加〕かさ　蓋笠などよめるは、重るの義なるべし、

〔日本書紀一神代〕一書曰、略中既而諸神嘖素戔嗚尊曰、略中宜急適於底根之國、乃共逐降云、于時霖也、素戔嗚尊結束青草、以爲笠蓑、而乞宿於衆神、衆神曰、汝是躬行濁惡而見逐謫者、如何乞宿於我、遂同距之、是以風雨雖甚、不得留休、而辛苦降矣、自爾以來世諱著笠蓑、以入他人屋內、又諱負束草、以入他人家內、有犯此者、必債解除、此太古之遺法也、

笠沿革

〔古今要覽稿器財〕かさ　笠

かさは今も尋常に有る所の、竹或は草などにてあみたるものにして、ふるくも替りたることな